

ジヨフジャエフ・ジャムフル
ウズベキスタン出身
筑波大学 理工情報生命学術院 修士課程

ジェンダーギャップ

私は今まであまりジェンダーギャップを感じてこなかったので、ON2022 の発表の時に話すことがあまりありませんでした。しかし、他の奨学生の発表・経験を聞いて色々なジェンダーギャップがあることを知りました。

女性は家事、男性は仕事という偏見はどの国においても共通の課題であり、徐々に改善しつつあるが、その改善程度には地域によって差があるようです。日本の場合は国会議場・政治家に占める女性割合が先進国の中で最も少ないことがよく挙げられました。

個人的には政治家には女性が多いか少ないのかではなく、日本に住む女性が男性と同様に平等に権利が与えられているかの方が重要点ではないかと思いました。また、女性の社会的な位置や生物的な特徴、例えば出産することなど、を考えそれらに応じた環境を国が整えることも重要であろう。

皆さんの発表を聞いてジェンダーギャップにおける問題は数えきれないほどたくさんあることを知りました。ミーティング後は、この課題を解消するためにはどうすれば良いんだろうと考えさせられ、次のような改善策が思い浮かびました。まず、個人レベルでは周りにジェンダーギャップに気づいた時にできることをやることです(例:同僚をセクハラから守る)。ソーシャルレベルでは認知度を高め、政府へ呼びかける(例:SNS や peaceful デモ等を通して)。政府は教育を通して小中学校から生徒たちにジェンダー平等について教えながら、女性活躍を進展させるために働きやすい環境・女性でも管理職に就きやすい環境を提供することが必要だと思います。ここでは

ジェンダーギャップの解消に成功しているイギリスのような国々から見習うことも多いでしょう。具体的には、茶山さんの発表にもあった通り産休や育児休暇を十分に与え、子供を産むことがキャリアの妨げにならないような仕組みを作りあげるのが重要ではあります。

最後に、茶山さん日本では「男らしさ、女らしさ」という規定のレールから少しでも外れることに対する嫌悪感が強く、自己表現を自由にできないことが多いのではないか」と言いましたが、私がこの5年間見てきた日本ではこの点に関して社会的な批判が逆にかなり少ないではないのかと思いました。なぜならば、日本のテレビを見るとトランスジェンダーの人もよく出るし、私の大学の哲学の授業では男性の教員が女性の格好で講義を行った時にも周りはみんな平気でした。なので、日本は中央アジアやロシアに比べると自分が女らしく振る舞うのか、男らしく振る舞うのかはかなり自由だと思いました。でも、おそらく欧米に比べてはそれほどではないかと思います。

以上